非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

第 33 号　2010 年3月23日発行

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1 - 21 - 7　静和ビル 1 階 A 室
Tel:080-6747-4157 E-mail:npj@peace.biglobe.ne.jp
Fax:03-3255-5910　Website:http://np-japan.org/

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

▪敵意をなくして平和を一
　攻められる心配のない国を　会員　小林善樹　2
▪ティム・ウォリス氏の講演を聴いて　理事　青木護　3
▪ティム講演録　理事　大畑豊　4
▪ティムに同行して　理事　大橋祐治　7
▪ひとりからの平和創り
　—沖縄NP 集会から得たもの　理事　安藤博　10
▪紛争を非暴力で解決するために
　—北九州州会報告　会員　川辺希和子　14
▪理事会/総会報告　理事　大畑豊　15
▪ NPJ 決算・予算　理事　大橋祐治　18

ティム・ウォリス NP 事務局長—宮城前にて

『敵意をなくして平和を ー
攻められる心配のない国を』

会員　小林 善樹

1795 年に書かれたイマニュエル・カントの「永遠平和のために」第 1 章「国家間に永遠平和をもたらすための 6 項目の予備条項」の中に「平和とはすべての敵意をなくすこと」だ、と書かれています。言葉で言えば簡単ですが、簡単には達成できないからこそ争いが絶えないのでしょう。

しかしこの難題をドイツは達成したようです。
かって雑誌「軍縮問題資料」(たぶん 2005 年ころ）で見た軍事評論家の前田哲男さんの論説の中で紹介されていた、ドイツの元大統領ワイツゼッカー氏の 2000 年ころの言葉は『ドイツは、歴史上始めて、隣国がすべて友人であるという状態を迎えた。では、何のために軍隊が必要なのだろうか? 軍隊は、ますます時代遅れになりつつある』というものです。ドイツは永年の努力の結果、近隣諸国との間でお互いに敵意をなくすることに成功した、ということでしょう。そこでは「もし攻められたら」という心配はなくなっているのでしょう。

NPJ のメィリングリスト上で、鞍田東さんが「もし攻められても、武力を用いることなく、非暴力によって市民を防衛することのできる方策を事前に訓練していきたい」と提唱なさっておられることについて私は反対の考え方をしておりまして、「もし攻められたら」という発想の根底に潜んでいる「敵意」をなくし、「(ドイツのように)攻められる心配のない関係を作って行くにはどうすべきか」のほうに意を注ぐべきなのだろう、と私はかねがね考えておりました。 それにはやはり原則に立ち返って「すべての敵意をなくすこと」しかないのではありませんか。国際間あるいは集団間でそのような関係を作って行くには、敵意を生み出し原因を排除し、相互交流し、ともに理解しあい、手を携えて共生の道を見つけて行くしかないのだと思います。 これはまた NP の活動理念にもつながるものだと思います。

日本では、「もし攻められたら」という想定の対象として、かってはソ連が想定され、北海道に重戦車を配備していましたが、今では朝鮮民主主義人民共和国を仮想敵にしているが、私はこれは日本政府が考え出したデマだと確信しています。日本を含めて、常備軍を持つ国家は、膨大な軍事費を税金から支出することを国民に認めさせるために、軍産共同体も一体となって仮想敵を仕立て、マスコミなどを通して宣伝し、国民を洗脳しようとする。

イマニュエル・カントが「常備軍は戦争の原因となる」と看破した通りです。「もし攻められたら...」という発想はその宣伝に乗せられてしまっているのではないでしょうか。
私は仮想敵の存在を信じていないのです。このデマを何とかして論破して行きたいものです。

ティム・ウォリス氏の講演を聴いて

理事　青木　護

ＮＰＪ主催の集会と，立教大学での講演会に参加した感想です。

１　いずれの側にも立たないこと

非暴力平和隊は，ガンジーやキング牧師の非暴力運動とは異なり，非暴力だけではなく，いずれの側にも立たないことを特徴としているということがよくわかりました。

「非暴力平和隊は，非武装の市民による平和維持・停戦監視に特化したＮＧＯであり，何よりも，紛争地に入って，紛争地の人のための活動をすることが目的である。」，「そのためには，ビザをとらなければならないが，反政府的ではビザをとることができない。したがって，政府とも良好な関係を保つ必要性がある。」とのことでした。

紛争地域の外から，暴力を批判する団体とは分業が必要であり，非暴力平和隊はそのような活動は行わないということです。

また，紛争地域で，現実に暴力を防止するためには，いずれの側からも信頼を得なければ，双方を説得することはできないとの話も理解ができました。

それは，教師が学校で生徒のけんかを止めるのと同じだとティム・ウォリス氏は書いています。両方の生徒の信頼関係を築きあげている教師でなければ，できないことです。非暴力で紛争を解決することが，いかに大変なことか，そのために双方との信頼関係を築くことがいかに重要なことか，この学校の例は，わかりやすいと思います。

２　スリランカのこと

少年兵にするために誘拐された子どもたちの母親たちを集めて，非暴力平和隊が付き添い，共同でジャングルに行って取り返したことは大きな実績とのことでした。

政府軍が完全制圧した後の，スリランカでの非暴力平和隊の活動の報告も興味深く聞きしました。

５年間で３４人のジャーナリストが殺害されたが，ジャーナリストに戻ってきてもらって，真実を報道してもらうことが重要であり，そのために，戻ってきたジャーナリストに付きそうことを第一に強調していました。何が正しいかを判断するのは地元の人だが，それを判断するための事実を報道できるようにすることが重要とのことでした。

また，タミルは怖くて警察に行けないので，非暴力平和隊が同行して，警察に対し，タミルに対しても警察がやるべき責任を果たすように求めることの重要性を語っていました。警察に対して国際人権法について講義をしているとのことでした。

ある地域で，タミルとムスリムとの間で，相手の店を襲う暴動が起こりそうになったとき，非暴力平和隊の活動により双方の店主同士の間に信頼関係が築かれていたため，タミルの店主がムスリムの店で前で体を張り，逆にムスリムの店主がタミルの店の前で体を張って暴動を防いだという話が紹介されました。通訳の方が，感動して涙を流し，通訳ができなくなってしまったのがとても印象的でした。

私が話を聞いた非暴力平和隊の人は，ティム・ウォリス氏で四人目ですが，みな微笑みを絶やさない優しい印象の人たちです。その人間性を私は信頼しています。

ティム講演録

日時：2月28日（日）午後1時～3時
会場：パルシック会議室

（記録）　理事　　大畑豊

初めは音楽の先生になりたかった。環境保護運動、反原発運動をするなかで直接行動にも参加した。1980年代ピースキャンプに参加し核兵器廃絶運動にも関与した。その後大学院に入り、なぜ平和運動、反核運動が成功しなかったのか、あるいはしたのか、その成功と失敗を研究し、どうしたら影響力を及ぼせるかを研究した。85年にＰＢＩグァテマラに短期間参加した。反対するだけでなく違いを作り出せる建設的なところに関心をもった。ＰＢＩ／UKに参加し、バルカン・ピースチームにも参加した。

NPの魅力

世界中で暴力を減らす活動が行なわれている。世界で軍隊は、英国は例外だが、人道的支援のみになってきている。人道支援として軍隊は必要と思われているが、実際はいらない。

17カ国で国連PKOが実施され10万人の兵士が派遣されているが、平和を維持しているのは、銃や戦車ではなく、UNの国際的なプレゼンスということ。国連本部で将来のPKOのあり方を議論した。10万人もの兵士を派遣していて90億ドルかかっている。そして例えばコンゴでスキャンダルがあり、チャドでは効果出せず追い出されている。PKOは危機的状態にあり、この規模・レベルの活動をするのは困難になっている。

いま、国連はNPに関心を持っている。つまり市民による非武装の活動にである。もちろん10万人の兵士の活動をすべて市民が代わってできるわけではないが。

NPは暴力的紛争の扱い方を変えていく。非武装市民もできるということ、人道支援にも軍隊はいらないということを証明していく。

憲法九条をもつ日本もこうした活動に関心あると思う。

ガルトゥングはピースキーピング、ピースメイキング、ピースビルディングという概念をつくり、ABCトライアングルという紛争の起こり方を分析した。

ピースメイキングはアティテュード（A)、態度、考え方を変えていく。会って話して対話して理解して憎しみを取り除く、解決していくこと。

ピースキーピングはビヘイビア（B)、ぶったり殺したりという行動、暴力を止める、ピースビルディングは暴力が起きる背景、コンテキスト（C)、根本的原因を取り除くこと。

市民によるピースキーピングは、解決の段階に進めるために、殺し合いを止める事。

・50人、100人規模で始め、軍に頼らない介入、軍隊のない世界を目指す。そのための小さな役割をNPは果たす。ごく限られた特定の分野のことに取り組んでいる。現在デモンストレートしてみせ、政府、国連、メディア、市民に可能だということ、軍隊は必要でないということを示したい。

具体的に何をしているか。NPはピースキーピングの分野に焦点を当てている。国連や世界は、軍隊はピースメイキング、ピースビルディングはできないと知っている。ピースキーピングはできると思っているが、国連10万人の兵士はピースキーピングで派遣され何をしているか。実はなにもしていない。メル・ダンカン前NP事務局長の息子が国連PKOでコソボに7カ月派遣され

たが、滞在中コソボ人には一人にも会わなかったと言っていた。ずっと兵舎の中にいた。地域とのコミュニケーションはなかった。ただいるだけ。つまり軍事力で平和を維持しているのではなく、背後にある国際社会の力で平和を維持している。ＰＢＩもNPもそう。国際的なプレゼンス。非武装の市民がピースキーピングを出来ることを、NPは証明しようと、それに特化している
やはり非暴力介入のNGOウイットネス・フォー・ピースは、ニカラグアにいるときにコントラから攻撃を受けなかったことを証明した。パレスチナでも外国人がいると兵士は態度を変え人権侵害をやめる。
国際的な、目に見えるプレゼンスが状況を変える。
敵対するもの同士がコミュニケートするニュートラル、中立的なスペースをつくる。問題を解決できるのは現地の人だけ。NPは人々を直接守り、対話するスペースを提供する。
国連はRobust（(力）強い、頑強な、強固な）なピースキーピングを求めている。「悪い」やつをやっつける。暴力や殺戮を止め、人を守る、ということ。ルワンダではジェノサイドを止める事ができなかった。ボスニアでは6千人の殺戮を止められなかった。国連は、軍隊は人道支援ができてない、人命を守れてないと考えている。ただそこにいるだけでなく、もっと効率的で強くなることを求めている。
リアン・マホニが「プロアクティブ・プレゼンス」という本を書いた。紛争が起きると頭の中で何が起きるか、指令系統はどうなっているか、科学的に分析している。それはシンプルでもある。暴力は非合理的で理不尽で戦略的でない……と考えられているがそうではない、と本の中で書かれている。暴力に至るまで人な何に影響を受けるか。それがわかればそこに影響を与えればいい。たとえば指令系統の各レベルにとか。
たとえば、チェックポイントの各兵士は上司の思考に影響を受けている。上司はさらに上の指導者の影響を受け、そのトップは政府であったり、お金であったり、貿易、国際世論、関係国であったりする。どこに影響与えたら止めることができるか。より効果的にするために分析する必要がある。
たとえば、スリランカのバブニアで去年パートナー団体に殺害の脅迫がきた。それはある政治団体からでトリンコマリーの政治家が関わっていることがわかった。パートナーとその政治家に会いに行った。政治家は関与を否定したが、その後脅迫はなくなった。
またジャフナから逃げてきたNGOスタッフがコロンボで反テロリスト法によって逮捕され3ヶ月拘束された。ジャフナの政治家が背後にいることがわかり交渉し解放された。
誰が責任あるのか、影響力があるのか、の例である。
・NPで重要なのはノンバイオレンス――武器を持たない、殺さない、撃たない、暴力でなく非暴力で解決し暴力をなくそうとしていること。暴力が「解決」することも認めるが、非暴力の方が効率的。
NPの非暴力は非暴力を示す、誇示するためのアクションでもないし、ガンジーがやったことをそのまま するわけでもない。当時インドを植民地化していた英国を追い出したり、戦車の前に座り込んだりと違う。もうひとつ重要なのはノンパルチザン（政

治的立場をとらない)。ノンパルチザンな非暴力　ということ。NPはキャンペーン団体ではない。人といる事が目的。
よその国のことをすべて理解することはできない。その国の人がその国の問題を解決する。
また現実的要請として、その国の政府との関係もある。効果的にするにはすべての当事者信頼されなければならない。現地NGOはノンパルチザンでないし、できないし、そのようなことは考えない。NPは軍隊、警察、地元民、デモ主催者等といい関係をもつ。
・根源的な理由――真実が犠牲になる。
混乱すると人は立場をとらないといけなくなる――白か黒か。
悪いところが拡大され、大袈裟になり、真実から離れていく。ものごとは白黒はっきりしない、シンプルにわけることはできない。
警察のなかにもいい仕事しようという人はいる。そういう人がその仕事をできるようにする。30万人の国内避難民いたが、政府や軍隊のなかにも難民を助けたいと真剣に思っている人はいる。
サクセスストーリーをつくること。児童兵士防止をユニセフやローカル、政府と協働し可能だと示す事。

ミンダナオではムスリム対キリスト教、２グループが憎みあっている。
スリランカよりも外国人は危険。スリランカでは外国人の、直接的、犠牲者はいない。ミンダナオはある。

Q. 丸腰だとソフトターゲットにならないか。
メンバーのジャリール（ムスリム）は3ヶ月間誘拐された。パーフェクトな解決法・対処法はない。しかし情報分析は重要。暴力は突然は起きない。殺そうとする人はそれがいい方法だと思っているが、それがいい方法ではないとわからせる。

Q. ジャリールはムスリムなのになぜ狙われたか。
殺す目的は国際世論、（武器買う）お金、自分の要求を受け止めて欲しいというメッセージだったりする。好んで殺すのはいない。誰でも良く思われたいと思っている。

Q. 勢力のバランスのあるところだから有効なのでは。
バランスのないところでもやってきた。政府に影響与えやすい。政府は悪者にはなりたくない。

NPの目標

ビルマ、パレスチナにも入っていける力をつけたい。
他のNGOが入れないところでも入れるNGOになりたい。政府を転覆するのが目的ではない。時間のかかる、スローなプロセスだ。
【話しの中で言及された団体】
Protection International
Internews　Sri Lanka
Secretariat for Coordinating the Peace Process (SCOPP)
International Crisis Group

ティムに一日同行して

理事　大橋祐治

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この度、立教大学の招聘で初めて来日したティム事務局長の多忙なスケジュールの合間、幸いにして３月２日終日東京でアテンドする機会があった。折々のティムとの会話を通して NP についての理解を深めることができ、また、あらためて NP が今転換期を迎えていることを認識した。それらのことについて感想を記したい。

１．朝、外務省アジア太平洋州局南東アジア第二課を訪問した。アジア第二課は、フィリピンのほかインドネシア、シンガポール、マレーシアなどなど担当している（スリランカ担当は南西アジア課）。ブラッセル事務所が今回のアレンジを行った。余談だがプラッセル事務所のインターンの女性が直接外務省にコンタクトしアポイントを取り付けた。ティムによれば、ブラッセル事務所には何人かのインターンがフルに働いているがすべて無給であるとのこと。NGO でのインターンの経験がキャリアーとなって就職に役立つのである。彼女の日本の役所への大胆なアプローチに感嘆した。

さて、ティムのアジア第二課訪問の目的は、NP ミンダナオが昨年末、フィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線（MILF）との正式和平交渉締結に基づく国際監視団の一員に、日本政府派遣の開発専門家などとともに正式参加したことの P.R.にあった。ミンダナオ和平国際監視団（International Monitoring　Team：IMT…本部：ミンダナオ島コタバト市）はマレーシア、ブルネイ、リビア、日本の 4 カ国と NP 他二つの NGO（国際赤十字社、ミンダナオ市民連合）によって構成され、停戦監視活動や社会経済開発を通じてミンダナオの和平と復興・開発を推進するものである。和平と復興・開発推進には治安の維持・改善が必要である。スリランカのケースと異なり、NP はミンダナオでフィリピン政府、MILF を含め利害関係者（ステーク・ホールダー）とハイレベルのコンタクトを持っており情報入手や影響力などの点で相応の役割を果たすことができる、などを説明。NP のミンダナオでの活動は日本政府との協働でもあり,この機会に日本政府に NP 活動の理解を深めてもらい、将来日本政府との戦略的関係を構築する布石としたいとの意図であった。講演会メモにあるように、平和憲法を持つ日本は非暴力による紛争解決という NP の理念、手法に積極的にコミット出来るはずであり特にアジアの平和のためにそのような貢献をしなければならない、との理解である。

勿論、ODA についても意見交換した。どのような可能性があるか、今後もアティフ・ハミードがマニラの日本大使館とコンタクトを継続する。ODA は現地大使館を動かす事からというのは、スリランカの場合と同じである。

２．スリランカ・プロジェクト

外務省訪問を終えて国会議事堂、宮城を経て東京駅まで散策した。外務省でミンダナオに関する資金援助のことにあまり立ち入らなかった理由を聞くと、ミンダナオと

南スーダンに関しては資金の目途は十分つけているという。問題は国際世論の関心がスリランカから遠のき、スリランカに対する資金援助がなくなってきている、NPSLへの資金援助をどうするかということが目下の急務なのだ、との答えだった。理屈としては内戦が終結したから NPSL が活動を継続する理由はなくなったということが云えるが、必ずしもそんなにシンプルではない（とティムは思っているであろうし小生も同感である。）。

思い出すのは、2 代目のカントリー・ディレクターであるマルセル・スミット（2005 年 10 月～2007 年 10 月）がナイロビ総会でスリランカ・パイロット・プロジェクトを振り返り、「当初設定した目標は実施の過程で必要な修正が行われなければならない」との発言、そして、昨年 7 月大畑氏とスリランカを訪問した時にティムが我々に言った言葉「NP の活動は発展（Development）してゆくもの」は現地で実際に活動する者の実感であり、重く受け止める必要がある教訓（lesson learned）であろう。このことを踏まえれば、スリランカにおいて、これまでと同様に或いはこれまで以上に NP のような組織が活動を期待されている状況にあることも理解できるのではないか。一般市民、現地 NGO、地方行政府などから活動存続の要請があるようだし、表立ってではないにせよスリランカ政府からも頑なな立ち退き要請はない。去る 3 月 13 日の NPJ の総会報告でスリランカ・プロジェクトの撤退の方針が伝えられたが、その理由はあくまでも資金の枯渇によるもので、NP としても、そして、なかんずく 1 年間近くカントリー・ディレクター代行としてコロンボで指揮を執っていたティムにとっても撤退は苦渋の選択であることが身近に感じられた。おそらくひも付きでなく NP で自由に使える金があればスリランカに投入するのであろう。

2002 年末に設立された歴史の浅い NP にとって重要なことの一つは実績作り、サクセスストーリーを作ることである。その基盤は 7 年を経たスリランカで着実にできつつある。ミンダナオ・プロジェクトに対する資金提供は活発で和平交渉も進展の兆しを見せているものの、ティムが言っているようにミンダナオでのムスリム VS キリスト教徒の長年の憎しみ、或いは数多くの武装グループ間の複雑な抗争など今後の展望が難しい。南スーダン・プロジェクトはまだ我々には見えてこない。NP の最大の課題の一つが NP の方針、方向に沿った形での資金調達にあること、言い換えれば、資金によって NP が振り回されないような発展を遂げることが重要であることが改めて明らかにされたと思う。

３．ピースボートとの打ち合わせ（吉岡共同代表）

日本のもう一つのメンバー団体であるピースボートを訪問し、年数回世界を周遊するピースボートの船上での NP の諸活動の可能性について熱心な話し合いを持った。高田馬場近くにあるピースボートの本部は何時いっても若いボランテアであふれ、

それぞれの場所で熱心に仕事に励んでいる。聞くところによると、ティムとピースボート吉岡代表との出会いは十数年前に遡るという。英国だったかアイルランドだったか、ピースボートの入港に際しトラブルがあり、当時ピースワーカーズ・UK の代表であったティムが問題解決に奔走してくれたのがきっかけであった。皆を集めて吉岡共同代表がティムを紹介しそのような事を話していた。

船が港から次の目的地までの航海上で（FTM に応募の可能性のある人たちを対象に）非暴力についてのワークショップを開く、或いは NP の地域会議をそれぞれの地域を航海する時を利用して開催する、同様に国際理事会などの開催についても可能性を検討した。例えば、秋に出航（10 月 25 日横浜出港）するルートはコロンボに立ち寄るので、シンガポールで乗船して 3, 4 日間ワークショップを開催し、コロンボの NP 事務所を訪問するなど。NP とメンバー団体双方の利益にもなり、船上で行うことでより濃厚な相互交流が可能となるなどのメリットがある。

４．Nonpartisaship に関連して

講演会記録にも書かれているように、ティムの意見は極めてシンプルである。NP の名を冠するのであれば、国内であろうが政治的立場をとってはならない、NP の名を冠するかどうかはメンバー団体の決定することである。総会議事録にあるように、ティムは、かって自分もそのような行動、つまり政治的立場をとった活動をしていたと云いつつ、3 月 5 日の沖縄集会（那覇市）の性格、招聘した講師から推測して NPJ の名ですべきでなかったと指摘したという（小生も沖縄集会に参加したので後で伝え聞いた）。

外務省を出て国会方面の道で信号待ちをしている時、ふと「Susumu　Ishitani を知っているか？」と感慨深い様子で尋ねられた。会ったことはないが知っている、どうして知っているのかとティムに逆に質問すると英国での国際会議で会ったことがあるという返事が返ってきた。信号が青になり会話はそこで途絶えたので、石谷　行（ススム）氏のことがなぜ彼の頭をよぎったのかは知るよしもない。故石谷氏は学者であると同時に生涯を平和運動に捧げられた非戦・反戦の平和活動家であった。良心的軍事費拒否の会の会長もされ、沖縄嘉手納基地の一坪反戦地主でもあった。NPJ の会員が nonpartisanship をどのように実践したらよいかを考えていたのかもしれない。今回、ティムと一日を共にすることで NP の理解が深められ、また外れかかっていた絆が締め直されたようである。

ひとりからの平和創り
—沖縄 NP 集会から得たもの

理事　安藤博

ひとりよがり？

「ひとりよがりに過ぎなかったのか」—那覇市で 3 月 5 日に行った＜非暴力平和隊・日本＞（NPJ）主催の集会から戻って先ず感じさせられたのは、苦い挫折感でした。「非暴力平和活動のこれまでとこれから—紛争地での憲法 9 条活用を求めて—」と題して、「＜非暴力平和＞(NP)の活動を、多くのひとびとに知っていただき、ご支援を得よう」とする集会でした。2010 年初めまでの１年、札幌、東京、広島、京都、小倉など全国各地で集会を重ねてきた実績を活かし、普天間基地返還など厳しい問題を抱える＜基地暴力＞の現場、沖縄で、＜非暴力平和＞の理念を活かす方策につき話し合うことを期していました。

ところが、沖縄集会の直前に来日していたﾃｨﾑ・ウォリス NP 事務局長から、この集会は開催目的の表現や国会議員を加えた講師陣の顔ぶれなどで「反基地」という政治的立場が表出しており、非暴力平和隊の活動規範＜Non-partisanship＞に抵触するという「注意」が伝えられました。

他方、「単なる『反基地』の集会ではない」とした集会の趣旨の表明が、沖縄の参加者にとっては強い不満を与えたとの批判を受けました。「NP/NPJ の活動紹介から始めて、沖縄の現実に対し具体的にどのような非暴力平和の活動が可能かを話合う」というつもりでした。が、「米軍普天間飛行場の早期閉鎖・返還と県内移設に反対する」10 万人県民大会（４月２５日、読谷村運動公園）が計画され、1950 年代の「島ぐるみ」闘争が再現されようとしているときです。「本土からやって来るなら、『島ぐるみ』を沖縄限りにしないで、『日本列島ぐるみ』に広げることを考えろ」という強い思いが地元にはあるでしょう。

「一人でも多くの参加者を得て」と願って準備した集会でしたが、講師などを除く来場者は 20 人余り。出発前夜ほぼ徹夜で作った配布資料は、裏表 8 枚×100 セット(800 枚)。万一の超満員を当て込んで運んだのに、その 3 分の 2 を捨てるハメになりました。「NP の本旨に反し、集まったひとたちは不満、残るのは自己満足だけ」との謗りを免れないかもしれません。

密度の濃い集会

50 人を予定した会場の半分程度しか埋まりませんでしたが、内容は密度の濃いものでした。

挨拶される糸数参議院議員

参院選対策会議のために早退しなければならないので、最初に講演を求めた糸数慶

子・参議院議員は、「平和憲法を持つ日本なのに、9 条の理念に基づいた活動がなぜ大きなうねりになっていかないのか、この問題に非暴力平和活動のみなさんと一緒に取り組んでいきたい」と力説。さらに、同じ沖縄県選出国会議員のなかに、移転した基地の跡地にカジノを導入して経済振興をはかろうとする動きがあることに対して、基地とは別の暴力を持ち込むものだと批判する熱弁をふるいました。

大畑豊理事は、NPJ を代表して「非暴力平和隊活動の総括と今後の展望」と題する講演をおこない、2002 年の NP 創設にさかのぼってその歴史と理念、具体的活動を説明しました。

NP について説明する大畑豊
（隣は金井牧師）

もう一人の講演者、金井創・日本基督教団佐敷教会牧師は、「辺野古：非暴力の実践の場から」と題して普天間基地の移転先とされた名護市沖合いでの反基地海上活動を、よくできた動画を駆使して分かりやすく説明されました。海に出るのが苦手だったのに、この活動のため小型ボートの運転免許をとったひともいたこと、基地建設のための測量船をカヌーに乗って妨害する活動など、かなりの危険を冒し、しかしあくまでも「非暴力」で。海上で米軍や海上保安庁、防衛施設庁の職員などに向かい合うときも、「帰れ」などの暴言をはかず、出会いのなかで関係を作っていくことに努めたと話されました。

動機不純”で

三者の講演に続いて討論に入り、光永勇・全国勝手連会長と金城睦（ちかし）弁護士が口火を切りました。金城弁護士は嘉手納飛行場内に土地を所有する、いわゆる「一坪反戦地主」約３，０００名で構成する地主会の代表世話人の一人です。スペイン旅行から羽田―那覇と空路を乗り継ぎ、少し遅れて会場に到着されましたが、「スペインから駆けつけた集会にしては」と、参加者の少なさにチクリと一刺し。「非暴力」を基本に、命を大切にして活動を継続させていくことを多くの人に伝え、共感を得ていくことの必要を強調されました。

金井牧師とともに辺野古での海上行動で身体を張った英語教師の宜野座映子さんは、海の美しさを写真で紹介したのに次いで、集会参加者、特に若者の参加が少ないことについて、「若いこは、デモにいくこと、こういう集会にいくことを恐れます」として、厳しい就職状況のなかで、平和活動などの集会に出て発言することが就職に不利になることを心配していると

いう深刻な状況を話しました。さらに、「それよりもっと厳しいのは、彼らが自己規制していることです」と述べ、そうした状況であるだけに、どのようにして若者と共通の言葉を持ち得るかについての話し合いを提案されました。

それに対して、光長さんは「必ずしも『若いこ』だけではなくて、参加が少ないのは運動の取り組み方が旧態依然としているからだという気がする」と、わたしたちの“痛いところ”を突くことを言われました。「集まりに行けば、懐かしいひとにも会えて楽しい」と思わせるように、「基地を作らせない」というお祭りを作る、いろんな動機を重ねる、「わたしは『動機不純』でよいと思っている。『唄あり踊りあり』の遊びこころがちょっと足りない、“遊び人”のわたしとしてはそう思います」と。

この那覇集会のために、会場の選定や映写装置の借り上げなどの準備に尽力してくれたのは、沖縄市役所職員の天願亮さんです。天願さんは、君島東彦・NPJ 代表の教え子という縁で、2009 年 9 月に沖縄市で集会を行ったときも、ご多忙のなか会場設営などにつき協力してくださいました。基地の町で雇用を確保することに腐心し、駐留米軍の福利厚生関係者ともやり取りをしなければならないこと、そうしたなかで十代を含む米兵とも平和を作っていくための交流を考えねばならないと語られました。

＜非暴力平和＞を謳った集まりとしては意外な発言もありました。「沖縄住民の民意にそむく基地移転に対しては武装蜂起しかない、『非暴力』というが、抗議すべき相手と仲良くすることなどない」と、オバマ米大統領が 2009 年末のノーベル平和賞授賞式で行った演説と一脈通ずる「正義の暴力（軍事力）」肯定論を激しい口調で述べた参加者がおられたのです。「非暴力平和」を語るわれわれは、反基地世論を切り崩そうとする政府の回し者ではないかとも。「基地暴力」に日々直面している沖縄の厳しさの一端を示すと思われました。

「ひとりから」の平和

那覇集会に先立ち、大橋祐治・理事とわたくしは、嘉手納空軍基地、普天間海兵隊基地、そして普天間の移転先とされる名護市の辺野古海岸やキャンプ・シュワブを回りました。辺野古で座り込みを続ける＜ヘリ基地反対協議会＞の人たちに会い、代表の安次冨（あしとみ）浩さんから、「フテンマ基地の即時閉鎖のため、これからもガンバリます」という那覇集会へのメッセージをもらってきました。

集会の後には、大畑さんの後について伊江島に二泊三日で行き、＜ゆずり合い・助け合い・学び合う会＞に参加しました。伊江島には、ガンジーに学んで米軍を相手に粘り強く農地を取り戻す非暴力抵抗運動を続けた故・阿波根昌鴻さんが作った反戦記念館があります。

東京、関西からも含め、約100人のひと達が来ていました。沖縄という遠い島の、そこからさらに離れたこの島にこれだけの人が来ていたのに、那覇というかなり大きな都市の中心街で当方＜非暴力平和隊・日本＞が行った集会には僅かその4分の1。「何かが足りないのだ」と打ちひしがれる反面、伊江島の会が長い苦闘の歴史と熱い思いに支えられているのを目のあたりにし、身のほど知る思いにもなりました。

最後の総括をした伊江島集会実行委員長の山内徳信・参議院議員は、その冒頭「安藤さん、大畑さん、平和のための闘いは一人から始まる事を、阿波根昌鴻さんの事跡から学ばれ、勇気を得られたでしょう」と大いに激励してくれました。

NPの＜Non-partisanship＞からすると、端的に言って沖縄ではNPの名を冠した団体としての集会を行ってはならないのでしょう。「沖縄の＜基地暴力＞も、内戦終結後のスリランカにおける人道問題も、ともにNon-partisanshipの則を守って対処できるはずではないか」といった理屈を立ててみることもできます。しかし、NPJ活動の至上の目的は、NPの現地活動を支援することであり、現地活動の障害になる恐れがあることは、決して試みてはならないのです。沖縄での活動は政治性を免れることができないが故に、NPJの組織としての活動は控えざるを得ないわけです。

13日東京・駿河台のNPJ事務所で行われた理事会・総会では、NPJの団体名称を変えざるを得まいという空気がかなり強くなっていました。Non-partisanshipに反することなく、同時に内外の政府に関わりのある暴力に口をつぐんだままではいないで必要な行動をとるためです。NP全体としては、＜非暴力平和＞という名称を持つメンバー団体が少ないことから、その名称を残すべきだとする意見も尊重して、この語句を外した別名称の組織を作ることも考えられています。「沖縄でもう一度」と考えるわたくしも、この二枚看板の方便が一策であるように思えます。

山内議員の「ひとりから」という言葉に、平和のための活動の困難と希望の双方が表されています。ひとりよがりを戒めながら、そして平和のための活動に取り立てて実績を持たない駆け出しの分をわきまえながら、わたくしは、日本で、特に沖縄で、非暴力平和を実践する手立てをさらにさぐって行こうと思います。

辺野古沖調査の非暴力阻止活動についての説明(金井牧師　佐敷教会)

北九州集会報告（１月２３日開催）

テーマ：

『紛争を非暴力で解決するために』

～紛争地での活動を通して～

会員　川辺希和子

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

講師：徳留由美さん、安藤博さん

主催：「キリスト者九条の会」

・北九州〝九条守りたい〟

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

〝九条守りたい〟の毎月の定例会では、主にキリスト者の方中心に声かけをしますが、今回は地域にある九条の会にも呼びかけました。〝九条守りたい〟メンバーは、毎月の定例会が、宗派や宗教や思想年齢などいろいろな垣根を越えた交差点のような場になることを望んでいます。非暴力平和隊の活動、特に現地での実際のお話を、〝九条守りたい〟の仲間や北九州の方と一緒に聞ける事ができ、本当にうれしい日でした。

徳留さんは、明るく歯切れのいい口調で紛争地の現状や実際の活動―Make space for peace ―がどういったものなのか、分かりやすくお話してくださいました。安藤さんのお話（レジメ題：それでもやっぱり＜非暴力で＞）を通して、平和への静かで強い想いが感じられ、「非暴力平和隊」の理念についても皆さんに伝わったのではないかと思います。参加者の感想で「今は基本的には人権を守るということをやっているが、しかしそれを通して本当に非暴力で平和を創りたいという明確な目標を持ってやっておられる、それはすばらしい、がんばってください」とありました。主催したメンバー自身が、この集会をやってよかったね・・とあとあとまで感動が続き、これからの活動のエネルギーをいただきました。また、参加者から帰り際に「いい会でしたね。」との一言や、「得るところがたくさんあった」とのメールをくださったりしました。２年前に北九州で開いた非暴力平和隊の集会では、なんとか非暴力平和隊のことをお知らせし会員を増やしたいという想いが強かったのですが、その後いろいろな活動をしておられる方に会い話を聴く中で、お互いの活動から学び支えあいたいという想いになりました。ペシャワール会の活動を学んだ時、２４キロもの用水路を作るというとんでもなく大きい仕事も、中村哲さんが現地の人に会って根気強く話しをする（そのような写真を見せていただいた）ことなくしては始まらなかったことに気付きました。

今回の集会においても、非暴力で平和を創るということは、人と人との出会いから始まる、とても困難な地道な活動であるが、未完成なその活動そのものが平和の道筋を刻み始めていることを思いました。平和を望む参加者にとって、とても示唆に富んだ内容の集会になったと思います。

理事会/総会　報告（要旨）

3 月 13 日（土）12 時から 3 時まで NPJ 事務所において理事会、総会が開催されました。その概要をご報告いたします。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

１、2009 年度決算予想並びに 2010 年度予算（別項参照）

２、2009 年度の活動報告

東京、仙台、名古屋、沖縄、京都、高知等で NPJ／NP の認知度を高めるべく説明会報告会を行なったが、参加者は 10～30 人程度、入会につながったのは数名に留まり運営に仕方に反省が残った。メル前事務局長に続き、ティム事務局長も来日し、直接意思疎通が出来てお互い活動に対する理解が深まったのはよかった。

スリランカ視察で現地の状況、活動について理解を深める事ができた。特に庭野平和財団から助成を得たトリンコマリー平和委員会への支援については、訪問でき活動状況を確認できたことはよかった。

また岡田大臣への要望書署名問題では現地プロジェクトを危機的状況に陥れる

可能性も懸念されたが、NPSL、NPJ 間で迅速な対応がなされ、懸念された危機

的状況は回避することができた。

３、2010 年度活動方針/計画

●　NP/NPJ 活動キャンペーンの継続について

見通しや戦略もなくただ集会が重ねられているとの批判的評価が出され、却下。地域からの依頼についてはこれまで同様こたえていく。

●　国際理事会への参加

2010 年秋、オランダかベルギーでの開催が予定されている国際理事会への阿木国際理事参加費用を助成する。

●　「非暴力連続セミナー」を再開する

キング牧師、田中正造、ガンジー、阿波根昌鴻、マーガレット・マグワイヤー、

ジョージ・ウィルビーなどの非暴力の実践等を取り上げ、非武装防衛について、憲法上の視点から君島理事から講演してもらう。また「観て考える非暴力」シリーズも再開したい。

４、理事等の人事

●理事、監事は留任を要請するとの提案があり、そのように決する。

●大畑・安藤理事の、それぞれ共同代表、事務局長辞任について

・安藤理事は「ティム事務局長から（安藤・大畑）辞任が事態の改善に一定の効

果があった旨の報告を聞いたことに鑑み、『辞任』状態を続ける」とし、また

「事務処理はこれまでどおり行なう」。

・大畑理事は辞意固く、撤回せず。しばらくはこれまでの事務処理は安藤理事と

分担しながら担当していく。

・大畑共同代表の後任として阿木理事の共同代表就任が承諾された。

５、NPJ の団体名称の変更する件について

議論の末、合意は得られず、また名称反対を主張している理事・会員が出席し

ていないこともあり、引続き検討することになった。

主な議論は以下のとおり（事前に寄せ

られた意見も含む)。

・NP 国際事務局から通達されている「Non-partisan 原則」に反しないかたちでNPJ メンバーの活動の自由を確保するためNP を冠さない名に変更した方がよい。(スリランカなど NP の活動地国に関してではなく) 日本国内で人権・平和などに関わる自由な活動を確保するため。 NP 国際事務局が「NP の名前を付した署名をしてはならない」という規範に反することのないようにするのがよい。

・NP は新しいユニークな活動をしている。NPJ はこの『NP』と同じ名称を持つことによって、その活動を国際的につなげている。世界的に見て、NP メンバー団体の中で＜非暴力平和＞を冠した団体は少ない。その少ない団体が名称を変えてしまうことで、失うものが大きい

・NP を冠した MO は数団体しかない。しかも活発なものとなるとさらに少ない。

・NP を冠した MO (メンバー団体) もピースボートのような NP を冠しない MO も NP との関係は同じである。特に多くの情報が得られるとか、決定に関与できるといったメリットない。メリットがなく、行動を拘束されるだけである。

・NPJ は、日本国憲法９条の思想と世界の平和運動をつなげ、日本国憲法９条を世界の平和運動、平和思想の中に位置づけてきた。日本国憲法９条を世界の中で孤立させないために、NPJ は、NP という名称を使うことに大きな意義がある。

・9 条を世界で実践してます、と言うためだけに NP を冠し、国内での非暴力の実践活動が制約されるのでは本末転倒。しかも NP の運営には関与できていなく、他人のふんどしで相撲を取っているようなもの。非暴力とだけ言って実践活動なければ却って「非暴力」への信頼失う。

・NP の「Non-partisan 原則」自体が実際の紛争解決に有効なのか、再考すべき。

・便宜上、「日本非暴力平和隊」とか「非暴力手段による平和隊」とか、名乗るというのでどうか。グループの中身は同じだけれども、「別の顔」を所有し、活用するのはどうか。

・名称変更のコストは小さくない。新版を作ってまもない NPJ リーフレットにシールを貼ることに始まり、他団体関係者などへの説明もある。無くなってしまった、と思われることもあるだろう。それだけのことをしても、同じ NPJ メンバーがすることであれば、結局 NPJ がやったと判断されて、NP 活動国の政府などから圧迫を受ける恐れがある。名称変更の実利はない。

・NPJ のなかに、あるいは姉妹団体的に、例えば非暴力運動センターといった組織を作り、問題ありそうなときはそちらを名乗るとか。

・名を変えて実体が変わってなければ結局 NPJ がやったと判断される。

<u>６、NPJ 会則の一部変更</u>

・日本国憲法第 9 条を活動目標におり込むいまの規約でも、充分に対応できるので規約変更の必要性はない、との意見が示され、否決。

・第 2 条 (事務所) の変更

本会は、事務所を東京都文京区に置く。必要に応じ支部を置くことができる。

→本会は、事務所を東京都千代田区に置

く。必要に応じ支部を置くことができる。

７、事務作業の見直しについて

・いわゆる「関西事務局」の新設

必要性が認められず否決。要は事務作業の分担が必要。

・NPJニュースレターの印刷を廃止しweb化について

NPJ メーリング・リストに加わっているのは、会員の3分2程度に止まり、後の3分の1の会員へのニュースレター配布は、郵送する以外にはない。またニュースレター発送時に会費納入依頼も同封しているので、廃止するのは現実的でない。

８、パンフレット「日本の防衛は　非武装市民の非暴力防衛で」の刊行について

「非暴力防衛」について、NPJ の組織的合意をえることは難しいだろう。NPJ 名のパンフレットとして刊行することには馴染まない。ただ、この件について、論議を深めていくのはよい。「非暴力防衛と非暴力平和活動との関係」を討議するシンポジウムを開催してはどうか。

９、スリランカ・プロジェクト近況について報告（阿木理事）

①　プロジェクトの撤退

NP では、紛争終結宣言があった後、しかるべき時期に現地プロジェクトは撤退することになっており、その時期は「戦略関係」ディレクター、事務局長らが検討し、国際理事会で提案し、討議検討し、承認を受ける。

②　2009 年５月、戦闘終結宣言以降の資金獲得の困難

通常、紛争、戦争が終結すると、そのプロジェクトに対する関心は薄れ資金獲得も困難になる傾向がある。実際 NPSL への支援は少なくなってきている。「避難民キャンプ支援」「人道人権支援」活動をしているが、活動資金はあまり、集まっていない。その一方、現地では「避難民支援」を専門とする国際 NGO が入っている。

ティファニー・NP スリランカ代表からは 1 月末の時点で、活動資金がほとんど、底をついた、との連絡を受けている。

ティム事務局長からも、スリランカプロジェクトに関しては、活動資金難にあり、ブリュッセル事務局、コロンボ事務所を中心に資金獲得キャンペーンを展開しているが、芳しくない、との報告があった。

タイで FTM トレーニングを終了した５名をスリランカに派遣することを予定していたが、FTM 受け入れ資金がなく、中止した。

③　今後

ミンダナオ・プロジェクト、南スーダンプロジェクトにたいする資金獲得キャンペーンは順調。スリランカ・プロジェクトに対する資金獲得キャンペンが好転しない場合、2011 年早々、場合によっては 2010 年末の「撤退」もありうる。

（記録　大畑豊）

2009 年度決算予想
2010 年度予算

理事　大橋祐治

2009 年度決算予想

・2 月決算の数値をベースに 2009 年度実績推定（決算予想）を算出した。

・　会費収入は予算 100 万円のところ 2 月末現在で 81 万円に留まっている。年度末までに会費納入遅延の会員の駆け込み払い込みを期待し予算を達成できると推定。

・経常収支過不足は６５万円の支出超過を見込んでいる。予算比約１０万円の支出超過増となる見込み。

・支出費目別にみて予算比増加が大きいのは；

活動支援費（23 万円超過）
［地方報告会を積極的に行なったためと、スリランカ視察、阿木理事のバルセロナ国際理事会出席支援費支出のため］

広報費（20 万円超過）
［リーフレット制作費、ウェブサイト構築初期投資のため］

講師費用（７万円超過）
［非暴力連続講座再開］
である。
その他の支出費目については予算を下回っている。

2010 年度予算

・会費収入は未納率改善５％（5 万円）、会員増加５％（10 人、5 万円）を目指す。

・カンパ収入は、2009 年度スリランカ視察費の約半分がカンパとして実質返還された特殊事情があるので、2010 年度は 2009 年度の予算額同額とした。

・支出は、広報費の半減以外の費目についてはほぼ２００９年度実績見込みの予算額とした。

・経常収支過不足は３８万円の支出超過を見込む。2011 年度への経常繰越剰余金は 46 万円となる。言い換えれば、2011 年度中に経常収支が均衡するよう会費納入率の改善、会員の増加、カンパ収入の確保を図る必要がある。

2008 年度会計監査

鞍田監事より、2008 年度会計監査報告書が提出された。NPJ の会計は適正に処理されている、との報告であった。
ただ、庭野平和財団助成金の受領とスリランカへの送金に関し、①入金については交付決定文書、受領に際しての受領書の写し②送金についてはスリランカへの送金に際して送付したであろう文書の控え、先方からの領収書～受領したことの確認文書の写しが会計文書の中にファイルされていてしかるべきとの改善意見が附された。

NPJ　2009 年度　実績見込み　　2010 年度予算　　2010 年 2 月 28 日

	項目	2009 年度予算	2009 年度実績推定	2010 年度予算
1	参加費	40,000	80,000	100,000
2	会費	1,000,000	1,000,000	1,100,000
3	カンパ	700,000	830,000	700,000
5	書籍等売上	0	39,000	-
6	雑収入	170,000	59,000	60,000
7	**経常収入計**	**1,910,000**	**2,008,000**	**1,960,000**
8	商品仕入(書籍等)	100,000	-	-
9	発送配達費	105,000	110,000	120,000
10	給料手当	360,000	360,000	360,000
11	事務所賃貸料	300,000	250,000	240,000
12	振込料	17,000	17,000	17,000
13	会場費	40,000	50,000	40,000
14	事務費	70,000	60,000	60,000
15	旅費交通費	250,000	175,000	175,000
16	通信費	70,000	28,000	58,000
17	活動支援費	550,000	800,000	800,000
18	講師費用	50,000	155,000	130,000
19	研修参加費	40,000	-	-
20	雑費	40,000	40,000	40,000
21	スリランカ･カンパ	100,000	40,000	-
22	広報費	250,000	470,000	200,000
	予備費	100,000	100,000	100,000
23	**経常支出計**	**2,442,000**	**2,655,000**	**2,340,000**
24	当期経常収支過不足	(532,000)	(647,000)	(380,000)
25	前期繰越剰余	1,487,240	1,487,240	840,240
26	今期経常繰越剰余金	955,240	840,240	460,240
27	特別収支残高	3,977,310	3,977,310	3,977,310
28	**残高合計（２６+２７）**	**4,932,550**	**4,817,550**	**4,437,550**

Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援してくださる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊･日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」**をご利用下さいますようお願いいたします。

◎正会員（議決権あり）
- 一般個人：１万円
- 学生個人：３千円

＊ 団体は正会員にはなれません。

◎賛助会員（議決権なし）
- 一般個人：５千円（１口）
- 学生個人：２千円（１口）
- 団体　：１万円（１口）

■ **郵便振替**：00110－0－462182　加入者名：**NPJ**
＊通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。 例：賛助個人１口
銀行振込：**三井住友銀行 白山支店　普通 6622651**　口座名義：**NPJ 代表 大畑豊**
＊銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話･ファックス･メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ 事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。
ウェブサイトからのお申し込み：http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

編集後記：NP 事務局長ティム・ウォリスが 2 月末から 1 週間日本に滞在して東京、大阪での講演会、NPJ 会員との交流、広島訪問など大変忙しいスケジュールを過ごした。設立 7 年、スリランカ、ミンダナオ、グアテマラのプロジェクトを実施してきたが、この間活動地域の情勢、世界の諸情勢も大きく変遷し、NP も設立時の理念、目標を「変えるものと変えないものとを識別」していく岐路に立っている。NPJ もしかりであり、先月号で NPJ としての non-partisanship（政治的立場をとらない）という NP の行動基準の NPJ への適用についての議論、NPJ の新たな活動スタイルの議論が高まっている。この時期でのティムの来日は、こうした NP の将来方向,NPJ の在り方の建設的議論を進める上で時宜を得た有益なものであった。今号も、前号と同様、多くの方から寄稿をいただいたことを心から感謝いたします。　大橋

非暴力平和隊(NP,Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際 NGO で、非暴力平和隊・日本（ＮＰＪ）はその日本グループです。
これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。ＮＰはこれを大規模に発展させるために 2002 年に創設されました。
非暴力・非武装による紛争解決が「夢想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。